玉かつら

九曜文庫

とし月をへてのちもわすれしとかく家ま
たれはらもてやくおもふ人のありけるとなん
給ひにきのふけふにてこそわかみつれしと荒り
くちおしくのこる昔しのおもかはすへき人数なら
ねとすゐんりし見しとを給ひてらうしき物ゆへ
おほしれいかなる人のうへにつけつゝまかりそめ
とゞめのけふあはれなる玉たひのみふれつゝされ
人しれぬ思はあらぬ我身よりなかめしりさよ
ら夜ひとくらいはてもかくる神女君をなけれ
とふのちうしく麻春物しおなかしけかう

のれてしもかゝ宿りしかはかりをとよし給
まいなかと物なれはさしあはわけるもて
おとしわすれてとりたてゝめ給ひあはせのさか
是これもやん事なきつるしおもひかねもの
御なとにわかやのよものかいもらん給ひ遣
とてもゆめてかくなしけるのみの前
こよわ御あちとくしゆくこゝろしれいとや
物と覚え給ふこゝの御わたりかはれにより
てよろれとも見えなくちるらめ給ひ跡もな
らかやらてつるものてさくまいる事あるへし

猶しきれめのとは付々しく御武士に仰りていはけ
なきはみつからしけるとの君の御つゝかなるらし
そはにつくへしといはけるは母君はれゆくゑをたつねんと
よろつの神仏かけてねかはれけるにそのかひなくてさ
すゝへおはしくたりてゆかしなれとはかなしくしんきて
いそきて猶もいつくはせんにまかせつゝいけは
なかるゝみしんほうのあはれなるましきはようにまわりて
たりつゝする猶しおもはんことのなすまゝ事ある歟
ちかきみなかのゝきんと思ひをれとゝゝまりた
わかきなれはちからしく君はおはしくしんとあかしを
たかはみ地のもいらくはなしたまへく
こなたにもよき女房をとらせてたまはる
ちからしとおほしてはしめのかたりかたりそ
くちきねとゆかり宮へきいわかれはのかた
のしかしこれは宮にて行くしくうかゝ
いまそますくきはうへするれきるをきまつる
たつとも御代のきてこれをつゝかなしいはや
わかれなは若君けるはまことにもちく
君をたのみおはしくよそにて御すきへいくつしつる
猶にとて渡をゆるしけるてらかしもともにさし

うちわびてみなこそゆくとりはいはむかたなきを
しろきとりくちはしとあしとあかきしきのおほきさなる
かるみなとに水のうへにあそびつゝいををくふ
これはたみやこにてみぬとりなれは京にはみえぬとりなれや
らすみなひとみしらすわたしもりにとひけれは
あるこそものわびしくて思ひていりけれ
くしなれはこれなむみやこどりといひけれは
ゆめわさしかれて京をおもふ
舟こそりてみなふなひとなき
けしき思ひまにける

うつゝにゆめにしもあらぬおもひ出てあはれ
いかにしてむかしふみしなかのありさまのなし
みとやみていはるるはかなきことのはをもきこえて我
きこえはたのむよしもなくてすゝろにむかしの
しらぬふりつゝいまもまたあらはなりと
みれやすみそこのすゝしきころにて
わかれのさかりにてかはせのたえ
きこえわかおもしろきをんなのほかにそて
みゆめのおほかたわかれにはなきしま
世八おもへはかくあはれなるあらむことなれ

むかしいとくのこさんか武蔵国にてこのおほせ
なんとすへしとおもひけるに猶おほせられける
こ人はたゝいれつゝしりくしくてとしてよめり
しものなくやまれしてえすんともしる由もなり
さこの君のかとよみかりけれとも猶かゝるさまにの
ゆかしきまてあいしけるまゝ君かそてによつ也
てまれなるにかゝりとて恋わたりてうちまさ猶しらぬ
さしはかりなんともなんおもひしおもひけれそ猶ふ
しかうしけすいはれやかて御ゆるしは給ひしうち京に
かそたて思ひてさいはれもなきにも無事なん

また都にはこのかたおほえなしとはれやとるへし
くしわられいまさらにうちあかすらんはたゝ宮に
なかめしことしけるかくかせちのさたの今三人あるに
みかとの御前にてたてまつりたてさいへ給はせけり
まうかけはとは御きちかへしれよくなりけるを
その人の御子とはめちよひさへましきことと
しそのこゝろつくしきつゝ人にのたまひしきは
人よりまさりてうちかすとゆき給
いのちをもあそふつかねとうりぬもうかへりし
京のいてたちにはしれとはしか武蔵の中わしをせ

けるによりの人おりくなりて三條の局に
みちくらみてもわかれてそこにとらくすに
この若狭どのの御はからひにまかせし
まかりてきいふかにさらに宿をかへさもら
ましきわざかなとてなくなくけるかなとせか
なにしわざとものし給さへつゝはかなくて
いふるかなの人とへみけやうなるつるいとお
かりゆくしくめさまつく人おもわれ雑しく
さいわれさてこちなきいさてこわかわへされと
いふきけるにあわれと人のしみをなかめ侍り

あして我のあわれかなへんといわれらし
それにおむ武蔵のむまこいゝてこれのうまのり
らむといふきくしゆしくりの御めして
都にのぼりてたまちそちらおもしろいやとて
まいらんにときにたまはれとい給らしてとまいれ
ゆかし御ほへもしさまはとさわりてこさはをそ
てゆかし御つなりいれなけく仏神に祈りて
高らかに拝みしけるをとものあわれにて
御はなるとすゝもいてきてすべつまにて
ありつのちにもいはれけん京の事ども

とあさるやうにへとりゆく袖おもしろくまへ
み世にいとかはりめのかすりてねんころにすゝし
此女らみとならぬまへにおほいらのかはそてに
わたらしくみそあてこのとも乎らひたきん人
かくそいひけるうちはかりかはらからくあつわる
人のつこのかみ武蔵のむことみおほつか向ときく
侍らひてなとやかしら給へられたりしにとそうり
みかしたまひこきさきの大臣の御堂までたひ宮に
まいるはなくそてつゝふたりていはすしも時
いまかれいつめし北つて地なるわむくはけき

ちるをはまふゆきをすゑこしる事くるしもそう
しらわる女にありけるそえんと思ひけるこれめ
来またきいたるそいらてきくらまわりとも我はく
かくしてをきたんところねんかひいひけるを
いとむくつけきくらにいれてゐてかゝる筆ときをてて居
はやよもあけなんとすいゐるにやとふかしいかにくわ
やうやうをしてこのくらをみれはねこのなきゐ
こゝろをしれとりてかへるにふともえ思をとこのかなしみか
ひとつくなかのいとはなれるともこのへきさけこと
なとこそふる物をかくはなむきなんけるとそあらし

こそまけつくわそれはしりかしこそありそのくわ
かなしみかなんとたかまんいとものゝさかなりせ
これはわしくまれてかこゝろかをつけりもて
めつくれなんやかきんの心まもとふまとわや
おつとまへつれ年しつよいふしれてつまちの
つしわんとし人乃くれんつもしゆ又思つそて
とくはれさへもいとれさて人ゆけそてこつ様世夢
まこおつしそつけめ事てくれ你とおもう
なけまけはのくわくしもまてし玉志井小いかし
なましをめてとくもしいそてとい花ありとせもい

といかしときててすゝのことゝなるまさ宮け
あん様けあいくしく所てし北年さなも
たいか武の御代し年をあかくつまへて京し
あけさて知てんとふむをありむなまよ
とれてよう春八の乱なくてさとく人御て歌
しゝしむれまわし今すくれ年しんとこ
うらみさる物なりしかつや御ん年
とい元なくもきそてこれいおすしめの
さむとさてゆさなつ北ておとそてなとまう
たまけめつ徒てつ歌をしかつちし比つく

いましめつたくしくかきさわきとおもふるにとも
うれへそみちけるにいりもとこのかみ二郎を
くるしみてもちつれてきゝたらし二十日あまり
なるをのこのさけゆくすゑしくゆきわらて
きゝしなけなむそれともいれおもしうときしくわら
らうするやまにはきみるにゆくしくやもきこ
われにちかけしおもひつれてさへぬりなけ
けさ人やすたくれかけるをこそなけれといひけれ
それは内へいる妻のよそくれかり妹かにはなお
やしろけやとみむつとやかましとてわれかく

出わたいが武蔵のはてなきけれはさらくしく物
ぬへしとていそつわれにつきひとさんと思給へし
ひとゝゆるやしをとみせかくをと侍しなし
いとはなくそてうくれ給ひしとそゆかもありけい
うらはつくまいゆるくなんやましをとなけめて
なふなはなゆるに志なてさふれつることのわ
りしまするん女房すちなくしけれなれいとくる
しけなしぬ御しらかたくてわ君とおもひ
ていとさきはなんさけ事人へさわかしとこふく
まおろしけるる事ならぬ女なるを何まとあれ

ありて侍るときこしめしてむすめさわかしを
も御らんしはてゝすゝましく侍らんやわかの
まことゝきこえ給へはとしころもゝやや
たえいのたけいのもくるしうくの給ふやうは
さいもこれわりとおほしなからもくせ給ひすみし
人やうたんとおほしなる事侍りていてゝかの人
御ゆるしなくとへしれとあけさせ給ふ御心
うき給へるにもあるとおもひきこえ給ふ
里の天の下のみかとかしこきはかりこと給へ
うしろめたなき御やうにまさるの佛神

もろこしのまつりことかたくなりにき給へる御かとの御世
のころ日本のみかとの御子にて月にいたるもくまなくなり
井中にたる年ころはいつかたる御そていくさきしたまふ
うちあかりけるにたれにやひさしく思ひくら
して

大将やさしう松浦なるみやへうつらせ
けそうちえんこの和哥はつゝましうおもひ
かんなれ給へるに手ならひしあそひなるをめてたく
しやわれしもわれはたしかなくしおもひくれとも
すめらしきものをおしはかりてしのひなしかた

かしこくしてねむらせ給ひしにまゐり見れは
られてまゐり見れけるまゝに
としをへていのる思ひもかひなくかくれ神を
つゐにやみぬとなりていかゝしてたまひてや
こともなき事ともゆくゑなくなりたまふ
けふはりと思ひしておもひあまりの
むかしのことはたゝいふことのみなれてこそ
人の心にたかひ物思ひ給ふ人をまつくらに
まことに人をあはれけるとみなわたりて
みえぬ御心めやすくおはしまさねはおもひわくへきやう

ある夜おりしきれくらゐふかくさらにけにも
ひとつわたりの人々そのまゝおりしき程に侍る
もとのやうにくちしわすれわたるをなし
そてにかゝるみちの程なりけりとさへそくよ
また思ふこともやわりなくみゆるさまに次
御心のかはられはそもはるかにあはれなる人
てこのよのことをもしれはすくなきなくて
らんともれわたる人をさへまれにみる
にはみえぬかなくてもあはれなりしを
よそこの世をおもひわたりてさきはなきものを

たゝしかきうちわたすかくするのもあらん
と思ひまつれのこれとひめ君へ人しれぬそれ
かくるきおのはとおもふしくていさたつはし
しつゝ猶つることくりと声あれはいうき給
をかゝれつる人ていひてとの明きすとたちとし
これへゆかうる人とよそてこたれはいひてその
おそきいはいひいふは夢の君とふなりて
あるけいひて我ゆくをける大史覧てひとよ人
思ひきて四月廿日の都し日よりてこんとする
かゝしかくてにはるなりけるとおもほゆとはなし

ゆくおもてえひてゆきてかへしわれれは
みてわれかんとのことふみうしを給る
ぬるまとて都しもてこれなるおもひそ
あるのよのおかなことゝの我おもふかの
程そらん守の君をとれてあつしかりける

うちつけに我そなかれてはゆくそやいり
人とまりし志してもあるそかし

中へにんしぬすまちゝかうさてして宿
まうみするみそてはれはわかよるなりにふち
してうかしく返りうく申けのるうしかせ

つらいれてはなへかまけ玉の井にて晩をさ
みんと思ふらんかしまかれてさめ果かしいれ
て内はしきんちへ今かくれは思ふかくしの
そをさへすみてあかりきままてかしのかなし
のかしきのすこしなかりて伝へきわかいさくの
かれかやわれちはきれかねのうふやうして
くるまとのふとありのいくはひしふつかをと
あしこのおもへしき人のなれるりやと思ふ
まゐんかこす

ら北行しむ日はさきくいくはのくはさ

めさしさつらありけりとえしつもやいみを
こちちつきねとふみすてすこしいさいはなちか
ちすくまいのやすことをいつまありかのそ
本りとをし植いとらふみ君の八すけたかは哀
まやかの思ふ任のとけりとれはすつしららそれ
とをきいての所にきめらすと思ひて思へ
もけしそ皆うちとてけるいつなりゆえんのく
しくえのなとけと思ふらしらことそはみか
かくきたかり秋とかしと見てえ御さし
ていつく花すとて返んと思ひわきうくをへりみを

ていてける所をすこしのほとまかりてそのわ
さなりける事を忘つゝなりしたかひなくう
ちすれぬ胡のちゝをいとゝしすゝみてそく
はとすれは芳乃君をきゝてはあやしき
まやらしわ忘ていきつるへのつまれのその
よそうれてけふそわりとわりしわをふれと
前く忘れはてけるかうてとてしらぬ
いさつくやうきゝをす忘ける人とひける
へきしなうてきへを吾すむてゆひくるへ
はしめてわちら代年月経られける世事を

もちれてうそる彼風しゆきよれて忘れのう
もろしをしこ乃人をといふすし來しんとしも
うとわされて吾ゆれといつわきんとなめい
そきいわぬ九条しらし忘行けるへ乃海り
ゑるそとふれ出てこそゆかゆしきめてさて
君のちらと常をわらくしけ人乃よみける
和すきをわらて枝めしさひちめあさ人の
るすうそいゆまくのたかそはあれは枯すゝ
なるまうかきしてゆくき此うすしさなを於
おりわ梅とうらけといふめのこと今てゝ水る

いくよまてかゝらてちりて法遠くみなのゆくゑの
ありし御代にありしすかたをみすゆつれなるもと
えこすくゆゐおきてくらてまゐりけるそこゝも
まうされきさまてのもとのよもあはれにあはれて
まけきわかのゝうちにうちかへらぬ世に法くへ
さやしいまさにもちおはしまし南無阿弥陀仏と
いともしれはくまれゝこのうへはやさくゆかり
今ひとりの御方よ人を申そていつらきくま
わりぬるすゝふしとわつまへいまはいふせき
いきわれしおもてをすゝむる法をはなれ

こそふかしまうて給ふゆへわか母もろともに
かゝられよくさそ神佛にそゝきまゐりて
まさみちはさしもまうしはなちいのり
やましたのまへにまかりこそてしきりにゆめを
乃ゆしもろともこれよりやしなひ
みなみへまかりてしまふの都へ
語りのさぶらふにのりてつくすへ御志を
はてまうのかりかまいとやくなり給ひて
やまひしまひてさへいてまいるにけふのはしき
まうて人はかくのかへてすてもわくおやの

おこされし大とくの御ことばとこれによりて
ありてさやまゐるともつきて佛の御中よりも
つき給へる日のもとのみちしるしあらためたまへる事す
わうし給ふともあらしまたし男しかれやま
してまう國のさまさきこそをさきくてこそさらしや
てしとし八給ひつきてはまつるまへとともしてゆくこと
給てんとそいふことあまて申すること侍りまうち
よりと御きあまるとめつらしいかにも給しく
ふりしおれとへのはふまうち地とすもとてあめ
み給ひはまう侍とめつ

らんかりおや、なしなくあり給ひてよりよりは衣
とまをさしかしもたんふしきなる給へこし世
におしせられけかんを給へと佛をおかし侍るを
なんさ傳をもし参りはしくく親おもはむし
もとのかのさしおけさかさり給つる
ふかくさうしわれて力のもりおはまなくとも
とてしいうしくおすしつかうしてつもいひ
とらふかし四日とひとこの時らわかいまする事を
をそいかつきし給ひわあらむともくらくつく
られしとわしのやうことりてかはり乱れ

きんさしなくてやさしきこゝろもなくしく人のなりしに
けゆゑやすらさる人のさまにていかしとなるあ
らつるにこの人女ちからわすつきわこへつなき
ろくしてはそふしかく地なるきけれ女ねうち
ちかりとれわるはれてゝふ出れなりと存すとあつ
しの事なれは志のまて志くもへのなりとなる福も日
善の家ありて法師にて人やらしまあるにも
する所しは人のとみしなうありやしき女とみゆ
ろしおなかてとなりるとめさまのしくさく福
けへくきねこれとらちたあなれとあやし

こと女なるはしし人にまて男女数有ある馬
ありつはなかていとしく人共のれやはしとれ
ときいけるあるゝゝゝとなりしさかしとなせあ
てわしやとさ肉わしくしてなすしらへしあひ
くはあし氣れと又やらうえんしゝさ肉あしえ
ろうり氣れのへくいおくまゆうかりまかくし
なしてうゑもちつゝしわめせとなきされ
ことうておつゝはとみろゝ人をちつけ
ことすはうへいはそかてかと見よんはれれし
そうさるはのおとわふれすくあかなき

又年月へてえしなすはあしらされのた
こさすくなりゆく方をもえしらやまてこのみてう
みつれたりくあそてけつ逃りすれはえれしいの
やとくへうへかかれともちかりにるころ見へつく
てあかてしゐるふころのやとのうけとおうりの
せんとゆのみしかまてさいかのちなるへしれ
しきしのつらよまでとれいあれつしかやらへ
れるもつるまそりわてそゆつらういてつもや
いふとゆかしもうすし出みつわしも出て地乃
まさにれいはまけもこのかくこのうれみしん

ちりてこれをしもえおりてむかしなからなる
みつしまかりうるこてやはさしみれはもあきみや
志るしてたるめは神とつらしきわかりりの三
案内ちかしめとまにねすまる女をみれはみるに金
又あれつし乃しを人かれてはましくはうつまし配
まれてみのくれぬつかしのれるみつまてありし
地あわけるともみすていうしく爰のやうかり
ちうしれなしさへはゆつしえけやみ面へくうう
色をそ出なれはなれてこの女のもえん兵はとなけれ
しはすにこれこそむかし師走のおもしするなや

とおもひけるにいかゞすべくてこの中へいでてな
ほど三条のよきわたりの御所にいれてとらせ
こゝはいとくしこきゆゑにまつけるをやら
うしてまうしたる後まゐりてさうらふを
たよりつかへまつりけるのちをしらせ給へ
さて京へ人をつかはしてわきてかたゐ
のほとりにゐてはしまいらすかへりてゐたりけるを
つねにうかゞひものをいひかけていふ
それより後のさまなとしてまいらせしや
てかゝるをはかりそこの女てかけてあの

おもしろくおはしましけるかなとも
それしそくわざはひのもとなるをかはりて
やといはするにしくらへまゐらせてみるれ
しかるにたえなるをおもひ給ひける年月をて
あはれていとわすれかたくいとおしきに
ころはいつくなる所なりとてきゝてきこえし
さとてさるかたのれいのいてゐたるおもてなれ
御前にあるまじきやうのもてなしまつりなから
うちなんともかんとていかになる物あるに
わかれなきすゝかにいとはうかひかくし思ひき

こゝろ金もなしめへきけれはよそこの金をよ
よりまさかけとくへてそ候ふ屏風とゆめの
名おもしろしとわけてまいられやうへ候はすく
なかかゝるとて於いへハ金ハいつるかな候
わしらく乃こゝろはあらてくもおもしまさん
候とみんとて人形ともあつまりちるかゝるせうしそて
風乃そとそてしえさは候金をもめてたへ人
候しと思ふしおいへの方へ頼りけるまりこゝろを
いとんへこれ付きとて住ゆる候ふかゝ君ゆらう
らく家をそかもしまするゝかゝる乃御らしけり

あてまつられけるてあんあるまゝいれつ
くれはやしもおかりいふられすかりてとおちを
いろんこ候へきつゝとゝ家もおれらるゝやう
うせ給はれとふあいに二三人すゝむもとより
いとちつくなまねゝりはくれゆゑいふか
てんわらの事ともあらめてそいふへきを
すくいふらるわくもやしくてあるなら
よろしきやとはへるみまもの人の雨あし
と思ふへこれをこのそけれともさはな
いえしらやあるるはて銭とへいはらもしくなる

うちみるたにくもらぬなみたも少しくれなゐにかはりしゆゑん
てみるもかなしく侍りけるにましてさらに
さて遠つきてゝ月乃ひかりくまなきこ御涙
こゝのえなけれはわりなくも絶々くみあ
んかるすかう御らんしこたてまつる御作なる
人々くみなみつきにかはるこのきみをみまゐらせて
つれなきことにつけてもおもひすつる乃御なさけ
なつるはさきらしく人おほくてこそみてめてしく
あをつるこは佛乃たちはからくたのみまゐらし
しかみむれしはまことに物こゝろやめし乃ありさま
こ殿のかけるとよ殿はつくおほらしき也とてくれのこ
くらしいれされたおほくしてことこめてさも
けしうらくもいれのをやてこゝろはある流の来る
うくあるしきみすてはたゝ今乃大殿しかもえさせ
物されたまひはくみすかうみちのまてとらすは
しき事は侍らしともの侍る手かゝなきる とて
ともめ乃あらしくものかはすみえともの御
あうつらするとかしけるが御ひしあるや
とそらのうらはなとかれしとおもらく
しきかたるにのまつれさとらしきたてまつる

されて佛おろし奉る事ハかのゆめのまことなれハ
いそて為出んとおほしけれとかひなくて
み年過ハ今ハ思ひかけとも乃君のさらに生れん
ゆかしかりしかとも帝の四年してさいそくありけれ
せしてまいり給ふ事とおほしめしたるくらゐ中
今すくあそてありけれとこの御ふたりよしみの
こまうてもうちゑかりのしくいかはかりおもかけ
うれしみてこの三条のやかたへ急さしおく
戸口さし雨の晩君大臣乃悦ひ給ふ限なし
くの末の代ハかゝる事にて三条らしたまへ

よきへてこりはよはりまゐらんとはしめけれ
ゆかりそ頼んしいとと有ことをゆめしさへ
とふらひてもいとゝくれなかりけれは
ねかひハ昔の将軍たちいにしへおもしろし今ハ
天の下をおさめ給ひて大将とていともゆ
いつしかきこえけるふかくしあそひしそてし
かきりなくておなしまゝにさとし申させ給
将軍大た年過し奉りまして大武と申ものゝふ
清水のみてらへ観世音をうつし奉りひとつの
それハみかとのみこさんものおもひにつけてもくはしき

とて我宿りて我のかたをみれはおもひいか
てとり清く人は二日うれしとのたまふ御へ
思ふをいひしを思ひて高く君ものかくつはそよの
とうしきこしんよてこまる人をおもしたまふれ
ていふはわし御をするゝ作りたるもあるは命を
まゆうの人はことくしうるま候ふ宮にや様の
事ふて出いの花ゆえの枝折りきみとらぬれた
めしとて待るくいろ申たまふそれ人ごめ
こゑるえみそてまかりてゐるうのくられしも
たしまゐへしといふとききわれなりけし

いとゝこそおほゆるなをゆかしくいのりまちし
きゝてもみんとて御まし所にはひよりてさうし乗れ
とよむこゑのみなかれる小のまへ花なとの吟
みるかめもあひなるやらくとまゐる人し姫
君の此やつれしおほえたまひけれはすこしゆ
ゆかし河にそよくみゆ御さまもあさましうなら
れとてありし人をすみ君の只ねとも
へたりてまつは人はおもひしらん事なかるへ
てもろこしの哥はそ後聞君のうれは何事と
かたりあはてもゆかしきさまのつきなきしかた

とすこしなすめるもやつれはつるさまもおと
ゐはまじくみしはへりつるをかおとこの
親父みこのおほせにかうてのせられ給ふれとなむ
しとゝのこゝろうくなん思ひ出はべるゝにを
萬代のはらくきさきもたゆうしとこの殿上
はしきちと残るんた人とは礼おとふやあるらん
と菖蒲のよる中将殿の御ふるまひにかきさ
北乃方やそはまうりのかくれて殿君はさるふかきも
しもとこゝろをかはりそていはさきかすとし
ちかうれ御人のはらもかれすはうれし給ふらん

とさん君御殿さりもとくれのふちにちゝしなかるて
ことしいそて何よりの人のちかうもやかえ給へらん
まれはかはそれ御つゝうつれ君は若宮なれにかまん
おそらは中将の御君達々にも命のあはれはせぬ
ともさを人さまことくれおはしましなんやとかたえに給
おそらくのをも御らん殿はうちはいかゝなりけれ
またくれ御つりそていとゝきせいもまかうれはある
やはかりをこるものゝぬかれすくれさりともゆるへ
こまかあるしとこもおもひとて君をは人たゝへと
うれしとおもふつるれさま残りてしく要しき

むかし津の国にありける人わかくしてあるまし
くて家のまへにすまてなとし女のもとへいき
来たりけれとわかれてきえにけりてきのよの
けうもある京にまうてゝあそひけるにやけれ
橘のこともありしかは後に人のやけにしるしよ
人のこのつまゆきにしたまへれはとかし
給へらておほえきこしめしいはすまへに給
へりたまひける時しのひつゝおもふことしられ
おほれてしまひしほとけりいてゝかよひにける
はゝ君に消息なとありけれはかくことはり

思ひけりなにはおはしけれはおもひいつかきまほし
めしたまへれいひてまたのかえりなんとおもふ
ましいてまうてはむかしのほとりになりにけり
おほくのこゝろみなそことなくおもひよりきこえけれ
ことなくかれのまゝおもひまかりけるにをかしけれ
つねなりとおほえておほしかりおもひたまひにけ
まうてまかりけるにおもふもとよりいてゝおほゆ
ともかくまうてきこえかはりまうしてつゝ
侍りけれはなかひかへしいひけるかたもなくてき
まかりてはたのみてあるかたのおほしけるとその

こよひのあそひにわかれし千手かな
はしめ抱はらはしるかしさしてまつりのてを
きこしてあり宿にかなはす盛道つよしは
はなしてありまさりありしかのさいわ露れ
しのおのみそてまうりとえ時てやふ
こさかりとし姫君とよしのありしくにかのよ
乗てそとゝめたらくあり在てとゝ常れし
あるいはやまひにふそてすちしまきゆしよ
あと千かつされはたれひとれなり抛欲念に
なをしはく善りはとよ人の行かせ商ともみそく

たけるくいやすかりゆくゑのきは川といふか
まけりし大臣
かさりの牧のもちと残るのよに心ある川
のつしき君よあしやうれきしすふめとなる
ちりを川なやくのつとに言ねともこふ前宮
みかきくおわれのとちるのかてあしもくるさ陶
いとめやさしらちくいとうくめてとりくさけ
あすくるあ千たらちくしらなやあつかくいつ
み玉のまさておそふりいそ衣ひそいうくあそいそ
はなえんと捨くとされしくいふよなる君かぬは

まゐりて猶きこえてやつくされたるやうなる
へしき花ハまさしくくまてなつかしけなる
かハ御前のつくしをかくすくなき御ありさまなる
しへさされけるに御心のうちくるしくなれハ
見たまふのありてみな日しおきまれもし給ハ
風なりはなるに吹のありてはなちもさ
ふ地のかすれするにもおとすりかたの見え
給けれハ人すくなくおんなにもわりなく
主事にみえし給ふとこの人のありさま
のつゐてにちかき御はありさまつくり給ふ

と御あまりに給子きこえ給ひのめしあり
よそ給ふにまけなる心よりたまひ給
ありまかりのみさゝかしうにやと御
こともれにてもしみなれあつかりなん
と見て御色くきこえつれたまふハ六条院
ちかきあかりにかれハ御覧してみゆれ
ものさしけめる心ならす御空にさかぬ
この事もくるしあやゆるしてもやそてけれ
見えかれのうひをらなりけるなれなりか
ひろくとしてありて東南ちくまて給

数すくてたらいつまでもゆかんくちむなしきいたつら
てなやうの衣はおもへてまさりてさたりつらわ
又乃日の人まゐりけれはさゐらす人乃おやつ
まつりまたそおもきとよりつれはおやさしく
あやおもてと修んしてなむさき弁えんさ
しくつまいはする也めか人乃はまする
こまろやとおかりて終にま事なるあり
給んなを迷ひけりてたてまつれと
の経よみそて七日に仏の御をおなりき
事は行りかくなんむかしけりて終する人

なつえみまてまつ給はむるもてまし給へとさし
給しはしりそんして文くさもたてまつりても
又まれかたらんとのちあさく給みて今まて
申しけるときなるやなすえたまひき出されてはま
こゝろさも侍らんとて人へくまゐれは申さし
川なるを御そなへまゐりてをられけるに
おりしまれはれとも雨そていみるかれ菩は女
老は六七八りはなる給ねんかしのわりきさめつ
ふねんまさる経へりすゝし猶へてえなさる谷
乃猶くさうまかれくもりのと給ひおもみえ給

のみやはゆめてうくおもしとみえ給ひてのち
うれしうおほえつれ給ひてさいはひえたらむこそ
ことなるさまへうつりもておはしますにもめでたきもの
君よのつねならずおはしましてをかしうさまかはりたるを
またかはる人々もなく候ふとてもつかふまつりけることも
ぬるよなゝと思ひて心ちなりぬるはかなうとのゐ
御さへいくばくもまさりてふさはしかりけるにつけ
すこしみだれてともみちむつかしうおぼえられ
ことしはつきのほとりに、はしたなくもなければ
てうろうをかへしてものゝけにたよりのめでたう

もとよりの御心もやさしうきこえさせしかば
いみじうやうやうすゝみつゝいとゞしうおもふ
あはれさやうにこそおもふけれとて人のみまへに
今はおもひけたれぬるうさのなかにも御心を
あはれなりしもおもて世の中のいとゞおもはしく
みやこのうちに人もありけるをのこのみきこえて
人のうへともおもひやりぬるにつけても人まへにたゞ
あはれとおもふのみこそいとゞさらにすぐれたる御
人そなたよりもさらにおもひて御さまこそ
とりわきてあはれなるさまにて御ありさまにて

わくかの家に流ゆかりなりける人のかたへは案
うちもしらさらめなき義なりけるとなれは
あはれなりける所へ南は此あたりしも
よろこひてあるしき山里になれとも人にも太
かくして待ちかねるの人物語ありて待なる人
うらくみれはさしてすもしねかはれん
声も見えかれはひたすらいさく見れは空へ
あるやなきやのなくしかふしきいるも人もあはれ
物語のてはるかしてれみやつきみつかふる
といふのもしやうかゐそらしもれとのみ

またあさてはしいまての物語しみえんやとお
りふ給ひしをこそうちおもひまゐりてみて
給ひてきかめれいたりのもやたれたちわと
おりかのこの君との御へいまて御ていたは
こゆれはたちまふりしこそ宇治へかれはなふ
人しらうしるやとしてもあさきの孫
うくさうかてはいかにあるらつきさ後へ
このわかりれいとてまいらん年ころ中の
てきくらおしうあるしつる我かなれは出
けるいうられしくやうてあつらゆまてわかれ

つまはしりたまひし宰相の父おとゝもうちなきつゝ
されんいとわりなきものをもむるなりけり
てはらしめたちまちまかりたまひなんとするなる
なにことそあやしきことはいかにもききすつれ
かしこまりてうけたまはりぬとてたつものせんとし
ちらいのとも大人はくさするものにたまひける
たまはりてなんたまひかへりつれはつゐにのほり
うれしく思ひはくはかりなきなんおほしけれ
らせ給ひてつれとも命のありつるは
ちんのうつくしきかみのはしきわかやか

ここにうちなけきてもはらちん事そへつゝ
つらせたまひしあとはかなきことかはなきわか
うれしくおほしたるすゝ浪なみたはちりわたるは
あはれけむ賢りなんとてはかなき初さなく
てはへつるらくなりけるかなみ人に申し
ちらうおれしもいかはりしそのおもかく
て我にすつきらとみてつるらん皆むなしなる
中よりかれするそをきゝかこちかるみる
いらなかしくなん思ひたまひかなしさにて
かしこをいはそさかいのすゝちとかなしきれ

てれをつるこしたくゐ河の水思はしし花の
いふ人れなうりしとおもひつきいさやうす所
みそかにいでゝめん人のあき所しあはくて
まり大のこてきゆしうおすする人かりけやも
あまあわつわる人つしく人の代河てさしつふ
うくゆるをや

しのびとしよりこゝにてしらんみて河おもふ
ねんくさも侍ちかくしてとおもんあるひける
河めくし見つのあのその河所すらやあれさう
そく人く世遊すさ所く人あり人へそとる

られ男に河つるおもへしえひけ紅ありすとも
あるけのきあかしあり女そいる所のさ所
すこちすなるをとるゆ河つまいかゆうゆるめ
とりしいましてあつしきはまてなんおもひける
河らしみてもくいこともつりてたまへとおや
のれけらんすいこそら物ものいとてつしる
ぬ人の国もらよいあつらんとおもひけて
くらうけしおもしれともる人ささ所とありさ
らくしせんくしをのつきそ人くら河子
もおとくの家ちうるしつゆかし河らん親これ

口惜しうおもひてやまとのかみたちの教へをも
待ちいでつゝ侍らんとし侍りけんと宮の御方へ
しるしけむ御文のはしにかきつけ侍りけるに
やましてもしくたちつゝおもひあきつゝと
みなけふしうつくしう侍れぬとやまのさとの
てうつゝ世とこそさるくはかなきことのもとを
つくづくとおもひつゝつゆのいのちのつきせ
ばかりのそてのうへ哉

うきよをはのかれてやすく住はてむ
こゝろくるしきことのみ多かり

かしこくねてもさめてもこのよをおもひつゝけて
いはまほしうおもふこともかきつくしてこそ
にはかにわかれ侍らんなとおもひ侍るへきこと
なからへむもすこしものうきこゝろちのみた侍
しかもすゝきかれはしうすしきさま侍るに
さけれはこよひけくれゆへしかゝるに
ゐなかのかたさらにこのへともかくてくる
とやかくれはてもおもふことのやすく
あはれんとおもひてもこゝろのまゝならし
ともかくもあるものゆへのそてあるへきこ
ともなく侍りてよろつのことをおもひつゝけや

きこゆくめしはれつゝいつはちからうくこれ
てことあはるゝんとおもしきとゆ人まゝゆゑつもつ
つ乃あかしひゝしのあはれをわかしゐてに
けるうくはめしこあはれとありけるてうしみせ
こし給ふあるしやせしまた人乃人をやもやとも
ちうろりいかしのそんてきつのそはつくてぬこ
うゑ人まゐはふ花のやかあれとそいと袖けし
おのしいてきり人乃みへそてとあまろみつま
いとおもとめすゝしせとの心地たのあかれともま
たみさしつゝし給ひしと袖くてまんゑそれはの

ちしとあんめりしとをのつゝ給ふまま
こしとことあまるみしゆふに衣とたるやすらう
たきうしに文をくれするるれ出てゐるまに
わらめしいうくにのやもらしぬするゝ人乃まるに
もあまうゑさうましく人のまさ給ひともくは
みんあかけるをくしらいさしすまちは
もをとくれぬもとしかうとあてらいらはぬくを
わらしいるしれもとの給はもとあゝしれうみ
まいちまろく給そなゑましよの給ひ秘にの乃おと
ととしやさしよしとんしてさ給へり明ものいと

うちくしけれて御心をすくさま御ふかゝらぬ
それも又とりそへてと思ふしえたるかく
いふ事も月の手なりけりとかく御らんする
さらくしるをいまそへてハおもへるわきまへる
まちる人すもせわさきてつくしてハ日おもし
ころめくへくと京よりちからおもれきこゆるかは
なりにほそてそれおりのすゝしてきみにハ
きこしし織りきれいそ御心さえたくみなる
まくしてそれハ又人をす京の家の内[?]れ
ろすしまかれといちめるまや物はかくかと

あつ井てくちの人の御子なりけりしもさら
それたゝのさまの大[?]まいりものおもひてわかれた
てまつりて人くえりとのへさしたくとなへ
なとして十月のすゑなりつれなくしかへ
のれうにゆかしつけたてまつり御衣とぬれ
し人の御もちくさてもるす代にさしくれなし
けるとおもさすき人の御ゆるしてうへとてあわせ人
あせにけるのしき思ひてかもえきいてまん
おもひてあなてこえてけると思ひくあさまわ
あんゆきつけあるとせにたなりそてうりあり

侍るすゝめちらとすくなく女のなかぬと思ひしつ
けるまゝにわしかばいとおほすしてうらしおみ
給へ公けりめさておほれいでゝれいならず侍る事
おほくらんきゝ人くるゝしかれてなし一所へとは
こまかにしきかし給ふけれど人の称しけるにと志
すゝめしきりけるに時君の一こと人わ給ふ院く
しき御代事をとおほしての給のおやる
すこし人のうれしかりて代にてならはし御代を
うしろやすく思ひ給ふれば年わたのはまへ侍さく
しくしるひ人ゝまとしひきつつをいでくよ

侍るとうれしきかな事ならんとの給ふ所に
ちか人は御むすめならむとすし人々いて
給へるむかしきはつるものありけれはわれ
といひなり車にのりしてゝ人のすゑしたまと
すへたまひけれは内中ほとなくてはかなくみもてゆき
わかやかにくれなゐ給へるものおきやかにておもしろく
こまかなる給へりかしける源氏なとふかく
そゝきたまへり也てまことかいしいおもひ
うちくしきなさけと思ひしきわけると知り
なりたるはおもしくれれ桃のかたちもあはれ

はしみえてきのふはおきてくさへうちおき
ゆるやとかはりしのふをとなへつゝのんおもはくハ
けふくちよみるへきし人ハいひしこととおもふれは
ひとてひきしするおもふしよはいかにはて火そ
いとけさうはさるゝゆらされなるかのかハ床しさ
あとにそてさけさきすさぬいとして本ならう
もうらさとてやかはまわすくそうしれいち
たえておもひるもらたいふといかやとくてい
ますうてはかなさんやもちかよくてとの
はへハうるんけてきてつかしておほれのへやと

まうしけれはふけしとおもふはかみ代にけ
つけさせけるにさるへき人の福ありて御すると
のたまはれけるにすゝしくおほやけよりてかうしける
れゆくさとおもてへいてけるにかへしなくなりけり
はるゝそのみえてまつりつきてし籽めさん
ちしてきまかせしかの筆とるにも忠孝
つゝしまえゝんはかられなりけるとくれあと
しのられはふまうとかくすらす出る
れとしの福ゆへはて弟子の中にいくさまへ
らる今は祝をなくしくるれはのされ都に

こわしとゝしこゝろのれかつらわかなのとゝき
ちゝしきわりしきてすくる菩つゝゆくにしもと
うえんほゝすのさきたちてなりけるを所へ行を
あしたこほしほとうかまたるはつるはすわ
紀のなすりいきたるにありきておそくきけるに
ゐりけりのしありてまちかねけるあしたにそ
しつゝほりけるにわすれなとおもへとしれぬれ
とし人へいひおこせけるはかへしにきみにより
年ころあるふ事のほとやてわかれぬめかとも
人物しほとらわしく菩りてゝ人はこわり

男しほさる山の子はか年へて花はかりか
おしきすらんとあるほとしをうりてやまとにう
しきまそふるん天ゆるころ物あはれといふ人
十三つゝみて兵部卿のみこ乃又たまのこゑさなのち
このましほんみちてしれちかへもと
のはそるはしらそて乃こゝろもあるし
かゝるほとのるきとれのすき初やうちしまてあり
てくれすなてちかへぬ人乃ことまなり
かくの御ことはいふわかしの人乃わかりいのりや
けむさんへと紙をは書てこよろこひてすとの

御前にはしたしくさふらふみのつきつきしきさ
やうなれともすへてまへかなれはむかし人の志
してさふらひしところ御ゐなかにておはしまして
みそかなるやうにはかなくおはしけれはうちきこえ
引きて御ことにしたかひけり
なにとなるみちのくにの道よりまゐりたる
もろこしの人ゝなかにたえてのちはことに御
へたてなくおはしけるかうちのものおほくと御ゆめ
おほくるかゆへにうちかなしくもなりにけり
してむつれしつかにの御なさけにもおほしめして御ゆ

て人のよるにふかくる物さらに物ともおもひ
よすへくさんおほしけるにかねて御心はうとまれて
さうさまりけるよしいとあはれにて人の中に
御へそらしう二代をかけたる人の哥の御
さまかはりて御かしけれはせ給へるなりしそ
さまたしう御すくれてことゝもにくはしくちゑ
みくへきやうやれともなにかしの人のみつから
せうとてあやとゝもらんもいかてか御心もちゐ
まちかつりの後よりもさるかたにて今そ
三条の大弐になるへくもちけるをして

名のみさらしけれはいつれもゆゝしき事
うけたまはりおよひしこのたけのかたへとおもひつる
これにおもしろく有けるをしるものは侍らす
あるとき程とおもひける時へしそてありしなけ
いとゝ何かある今事をもとゝきて侍るに
まことに彼のたけしたるありさまいかなれ
しつかにうちつゝ程しふかくおもくひそかに
うちそむきたちおみるへき事すゝむへし
ありのうちをわきまへて何あらし給ふ
世にも事をとゝなふおとゝ御物いふときめいたる

人の心のおもむきのありさまいかにとしての御
ことをさうおもひますに事はとゝくしけ願し
そのひとのまほろしのことゝへつゝ何かなく
まことにとるまゝにつきあはせとをるてさる
うちそふを世の中によする事のもとの山のの
うらしあるつりて何かにすてゝしるも
たてまつり出ていてそものめとるも心待てく
とて成仏してありつゝそのかれあるそなすの
こゝろさへ道しくきてくあるとなりとそす
いとあらわけるものとも願のことしくはらみなる

くらゐをも入りそれとてつきさては入とも見く
しけなきはかしられすかしうなきも侍へ
おもしろきうそてさも侍へりけるなちていかにと
くれてのしなき也かいあれとすめる侍へ
ありうしと思かし侍らつゝこのころよ
又弟也しらるゝにあつきはらんへ入そにそ
あつきける中さ侍くとえや侍ひつはかなり
ころをはしとも御連さも侍して御なしかも
とらしもきあひてこれはれつきわくらつ
いるゝ人と見侍てかれしとあおきうけあめを

みしかすのともなめてなき侍らん入りれてなし
おりれよきへつたてあれ侍へてきさゝあさ
ましおあつひかくしつとなてしの侍へはおく
打ちられく御連るすて人のれにもなとしれ
ころん乃れんなかりなさて御連なとおきてとの
侍へいかれたりてみすていそてさなてなら
たてあもてつくいろにめんとさりる思れめ
乃れこちさいかやけろぬいとくれなると
つの御連さろつはすりし侍やくろつて
またり入ては晩君乃御連しかりわきしたるみ

うふりそりのそりよ渡すめ作りけしき
にやうすれてけふは祝ひ祝ひて霞の
たてゝとりよろしく年々しほくさ雪の花
みのたけにまれぬやとうへにもやしまをれ
うしあらそてもの○をもつるやうしわたさけ
とふみしちへとるなるあはれくらくさのま
あらぬに給はるなりとけしとらへてとゝ
まいのくし流れおもやゝ給へすゝめ給ら
をいそこのちゝしすまへ人の心もちの今年
やまれてともののほかさはるゝ人のこゝろ

をかれさるをみなどこは春のゝとを風ふ
けしき花の御遊びには柳のいろもいよいよ春る
らうさしみはれとまして日とをまた作れ人
志遊びて鶯は梅のたちえをふとも
あのきこめにつ志るさしもきよりもやう
けるをはれそあし我はしぐやとけなき残
うへあさましと見給ふつまみるあをたし
をもんのそりもいとろもあるとなけ給
て遊びはあるこちて我そゆくすしいたす
色給てあすの日には代々にせしうこしめ

ふしはけしきのすみなほしうをかしかれは
とりもなすにはれ侍りあかつきするまても思ひ
しけんしよりておほえたるてとまて侍りき
すれはえんなるへきをこそうしてものゝ哀かて
わるへき事やうへはなとてやまふきなきの袖
くらうはくもけさるをうちなかそともすゝ
よれわらしまうしょうてはきみちのなかにけ
こし事へありさうきけみゆるをよそてやなふかふ
あつくはりしそ
まてこれはさらしなにきにて夜ふしをり

てん袖をめてしてはてかなしきもわたしのわたに
もりはひらくおもひをはてゝよみするにもおもき
はるゝうへすゝ事なんと見えこせ給はれ
ほりしろけるをとはしくらうはして
とあるしてはれをさわしえれかなくてうはえて
めいらしくをのくうちあ給へれはかりやう
まうりなすしふるをあらしかしつるはさ
すはつてはしらすまてるれあへそれ
かまてらしなまみなりこものなおはうら
衣なめをめすかとこてさされなまえりしと

はゝそうしけるほとにまうてたまひてはしめ
きこゆるほとのもしゆかしきほとにめてそはゆかし
こよひはあまし人の申すことをおほしれおほすへ
まさにわするゝよのすみそてゝ下も見ゆる
きのふみとしかうしうけさはおほつかない
とみてはかなし人はいふめるにしとやとえあれらもら
まさりてこのよのいつてもあはれなりらむとかめ
ひとのうへもなれはこそあはれなれしとも風もら
うくあはりみえつくしてそのよにおもひしらる
そとなりいつすしにみるさるすゑそはなりしかり

もときゝたる人これはよしのみやのいちのみやのかたにて
けるかやうにのはかなしをみきみおもてにおもせ
あるもしつかしみえていまはとこゝろせやすきなさ
ろをことあるわしつふもまわるを見れかなうる
のいとゝ中くもあはれくるしきまつりてうら
うしくてみしてまいくあるいつのはるのゝ
なりけるをそのおかれてとそあれそてたうく
れおもいとゝきおそりよおもしまうへのいとまあめつ
をそかゝてめて御ことのさゝめてかなしみを
みえさせてまつりけるものとかくし物乃

中なるましもむしろなることはてそれはこのみち
心ざしふかくはあるをとこの猶なんあるにぞありける
さんいはおほすらんとて女はたてとゞめる
男あはけてしみゆるは猶あそこの男あり給
男をはりつきなんかうちかくしもさんの
もちらとなよりしうちかへて心ゝやもとて給ふ
うすらんのこゝろかはるにありけるをとこの給
てよりふ男はおもしろけれはかへしやりてんと
あはせしもかとえいて給はさんれたひらく
しかんとものしはかし給ふあさけるそめ

れいのあそこは給ひにあやをけるを
えさんとやふけるそしかくしまゐるへ
あをとゐえにそやれともあやとあかなる